令和　４年１２月　１日

鹿追町議会議長　吉　田　　稔　様

産業厚生常任委員会
委員長　加　納　　茂

所管事務調査報告書

本委員会は、下記のとおり所管事務調査を実施したので報告いたします。

記

１．調査期間　　令和４年８月２９日（月）～８月３１日（水）

２．調査地・調査項目

（１）枝幸町

①新規・移転就農について

（２）美深町

①チョウザメ事業について

②森林公園　びふかアイランドについて

③新規・移転就農事業について

（３）士別市

①いきいき健康センターについて

３．参加者

委　員　長	加　納　　茂
委　　員	狩　野　正　雄
委　　員	川　染　　洋
委　　員	清　水　浩　徳

（※台蔵　征一　副委員長は都合により不参加）

農業委員会事務局	局長	津　川　　修
議会事務局	局長	坂　井　克　巳

４．調査の目的及び調査結果

（1）枝幸町（人口　７，４２１人）

【まちの概要】

〇平成の大合併（枝幸町と歌登町）で誕生した北海道最北の新町「枝幸町」。

〇オホーツク海に面した枝幸地区と四方を山に囲まれた歌登地区からなる。

〇山、川、海がもたらす豊かな自然の恵みが育み、農業、漁業、林業等１次産業が盛んである。

〇面積は道内市町村で９番目、全国の町としては５番目に大きく、札幌市とほぼ変わらない。

〇農業は、家族経営体の農家を主とする酪農専業地帯で、酪農に適した冷涼な気候とオホーツクの雄大な自然に抱かれて、安全で優良な生乳を全国へ届けている。

【調査目的】

新規・移転就農について

【調査結果】

枝幸町と歌登町との合併直後には人口は１万人程度であったが、その後人口減少が止まらず現在は７，５００人弱の人口を維持している。産業構造はホタテ、カニ等の漁業と酪農を中心とした農業が主な産業である。

新規就農は、平成１１年から令和３年度までに既に２０組、令和４年にも２組が参入した。そのほかに７組が研修待機中とのことであった。参入者で挫折した人はいないが、過去１０年間での離農者は４２戸で新規参入者は１０戸であるとのことで、離農率が非常に高い町である反面、新規就農者も多いのが特徴である。就農者には国、道、町から手厚い援助もあり、１０７戸の農家戸数に対して就農者が現在２０数戸であることから農業者の新陳代謝が進み、若い人の参入で農業に活気が出るものと思われる。現在も新規就農者の募集中である。

【考察】

酪農専業地帯でありオホーツクの厳しい環境であるが、各種手厚い支援もあり、土地価格も１０ａあたり３万円から条件の良い所で５万円とのことで農業者にとっては大きな財産にはならないが、新規就農者にすれば土地

取得への負荷は少ないのであろう。

現地調査では新規就農した４０代夫婦の農場を視察した。住宅や土地、機械の一部は離農した農家から購入したが牛舎は老朽化していたため大幅に改造しており、ほぼ新築同様であった。牛舎等に相当の金額を投資しており、町等から手厚い助成があったとしてもかなりの額を償還しなければならないと推測する。

就農して４年目で経営も順調とのことで、現在、土地６７ha、乳牛６７頭、牧草はすべてラップで保存しており、放牧はしていないとのことであった。こういう若い意欲のある人の参入が地域に活気をもたらすものと思われる。

（２）美深町（人口３，８９２人）

【まちの概要】

○日本最北の稚内市と旭川市のほぼ中間に位置する。

○昼夜の寒暖差を生かした農業や、豊富な森林資源を生かした林業や製材業が基幹産業となっている。

【調査目的】

①チョウザメ事業について

②森林公園　びふかアイランドについて

③新規・移転就農事業について

〔①チョウザメ事業について〕

【調査結果】

美深町は、１９８３年（昭和５８年）水産庁養殖研究所の飼育実験として、びふかアイランド内の三日月湖にチョザメのベステル種３００匹を放流したのが養殖事業の始まりで、翌年（昭和５９年）には、びふか温泉施設内にチョウザメ観賞用水槽を設置し来客の目を楽しませた。

野外にはビニールハウスを設置、水槽での養殖を試みたが試行錯誤を経て１９９３年（平成５年)、初めて卵をとることに成功した。

しかしながら、生育環境である水質や水温、餌が十分に整った状態であることや適切な受精時期の見極めができる知識をもった人材の確保が困難であり、簡単に養殖が進むものではなかった。

１９９７年（平成９年）８月に、総工費２億４，４００万円のチョウザメ館を建設し、飼育環境の向上を図るとともに、観賞用としての充実もす

すめたが、孵化、養殖技術の醸成は容易にはいかず、美深町が目指した「チョウザメとキャビア」による町おこしの厳しい道のりが始まった。

２０１４年（平成２６年）には、北大大学院水産科学研究院と包括連携協定を締結、技術面の支援を受けつつ、総工費２６００万円で美深町の旧小学校プールを活用し養殖（現在は加工施設）を稼働させた。

２０１５年（平成２７年）からは、美深町地方創生総合戦略に盛り込み、地方創生政策の目玉事業に掲げた。

２０１７年（平成２９年）には総事業費７億６４００万円の稚魚孵化棟と親魚飼育水槽を中心とする辺渓の養殖施設に着工し、キャビア生産と魚肉の活用を目指した。

２０１８年（平成３０年）から、美深町第三セクターの美深振興公社から町に移管されている。町の第三セクターを統合して運営を担わせる。

２０２１年（令和３年)、美深町第三セクター、美深振興公社（社長：山口美深町長）は、塩漬けしたキャビアの瓶詰「美深キャビア」を商品化、２０ｇ入り１万２千円、計１７３個限定で販売し完売した。

同年秋の卵採取は、キャビアの生産量が過去最高の９．１キロになり、２０ｇ瓶詰約４００個が製造するも、事業の収支の見積りがあまく、依然赤字で、目指す産業化にはまだ時間がかかる。また、２０ｇ瓶詰キャビアは、冷凍保存のため解凍して食すには量が多く食べ残しが出てしまう問題点がある。

チョウザメ事業関係者からは、「少しずつペースが上がってきたので期待しているが、産業化にはあと５、６年はかかる」との話や、元町職員からは、「ノウハウのない役場職員が収益事業を担うのは無理。産業化を実現させる綿密な計画もなく、町民に説明もない」との疑問や、美深町の山口町長からは、「残念だが任期中に成果はでない。やめた方が楽だが、今更やめられない。明るい光は見えたので後の人に引き継いでやってほしい」と語ったことに対し否定的な町民からは、当然のごとく厳しい言葉がある一方、肯定的町民も多数存在している。

【考察】

美深町は、３８年前から続けるチョウザメ事業に苦闘している。２０１４年に国が「地方創生」を打ち出したのがきっかけに、７億６，４００万円かけて整備した新養殖施設の効果でキャビア生産量は向上しているものの年間維持費が３千万円にのぼり、キャビア瓶詰４００個を完売したとし

ても５００万円足らずで採算割れの厳しい状態である。

鹿追町チョウザメ事業計画では、事業費１，２４５万円、収入２５０万円と試算しており、９９５万円の赤字の見込みであるが、令和６年度以降は雄の出荷を見込んでいるため収入額が増え、令和８年度には事業費１，３０４万円、収入１，４９２万円となり１８８万円の黒字と見積っているが、かなり厳しい現実が予想されるので、この計画の趣旨のとおり、１年ごとに事業の状況や課題を検証し、内容を確実に修正していかなければならいと考える。

また、キャビアの生産にあたっては、解凍後１回に食べる量として２０ｇ瓶詰では多過ぎるので１０ｇや５ｇ等の瓶詰を検討すべきである。

参考事項として、近畿大水産研究所が女性ホルモンに似た作用を持つ「大豆イソフラボン」成分をチョウザメに与え、全て雌にすることに成功している。雌は、雄にくらべ成長が早いため、全雌化によってキャビア生産効率が上がるとも言われているので調査・研究する価値があると思われる。

〔②森林公園　びふかアイランドについて〕

【調査結果】

美深市街から北へ８㎞、国道４０号線沿いに広がる「森林公園びふかアイランド」は、「水と緑」をテーマに自然に触れ合いながらのびのび遊べる自然体験ゾーンである。

総面積７６ｈａの広大な敷地内には、天然温泉、車乗り入れ可能なキャンプ場、三日月湖を望む開放的なロケーションのあるオートキャンプ場、テニスコート２面、天塩川の川下り体験ができるカヌーポート、９ホールのパークゴルフ場、人工芝でできたターフゲレンデ等のアウトドア施設が揃っているとともに、ビーチバレーやミニバレー、ミニサッカー場も完備されている。

キャンプ場近傍の建設事業費約２億５，０００万円（平成８年山村振興等林業特別対策事業）の美深チョウザメ館は、４種類のチョウザメを無料で見学できる施設となっている。

びふか温泉裏にはある洋風の城を模したようなお洒落な建物「美深の道の駅」では、「美深キャビア」や美深の特産品を多数取り扱っている。

【考察】

美深町は、アウトドアやスポーツ環境を温泉施設周辺に集約し観光客を誘客していがスポーツ環境では、各施設の規模が小さく物足りなさを感じる。

鹿追町のスポーツ環境施設は散在しているものの規模等充実している。

キャンプ場は、車を場内まで進入させ側近にテントを張ることができることや温泉入浴ができる等、利便性はあるがキャンプは自然体験ができるからこそキャンプであり、鹿追町の然別峡のような自然を満喫できるキャンプ場を好む人も多いので引き続き運営していただきたい。

チョウザメ館は、観光客に「チョウザメの町びふか」を周知させるために建設したものと思われるが、高額な建設費を費やし鹿追町のチョウザメを周知すべきは検討する必要がある。鹿追チョウザメを周知するのであれば役場ロビーや平成館に水槽を置きチョウザメを鑑賞させるのも一案である。

キャビアについては、道の駅と温泉で購入可能であり１万２千円と高額であるが、観光客に多い日で３～４個が売れているそうなので「鹿追産キャビア」が道の駅での販売やふるさと納税の返礼品となることを期待する。

〔③新規・移転就農事業について〕

【調査結果】

農家戸数１５７戸、経営者年齢が６０歳以上５４％、７０歳以上１３．８％、８０歳以上４．３％と高齢化が進んでいる状況である。

基幹産業での人口対策として、美深町では平成６年度からこの事業を行なっており、これまで１６組の新規就農者を受け入れてきた。現在も２組が令和６年就農に向け研修を行なっているところである。

町は北海道農業担い手育成センターと連携し、就農に興味がある人の情報提供を受け、就農希望者と就農支援機関（町・ＪＡ・普及センター）による面談を実施している。

農業を始めるにあたって、必要な知識・技術を身に着けるための研修プログラムもしっかりしており、事前に２カ月間、本格研修として２年間程度の期間を費やしている。

既存の農家は就農に必要な技術や経営管理等を指導し、サポート体制が整っている。また、研修生用の宿舎も用意している。資金面においても、研修から就農において支援制度を充実させている。実習助成金として月額１５～２０万円以内、本格就農に対しても、経営資金、生活環境整備にかかる補助金等５００～２，０００万円の支援を行なっている。

【考察】

美深町においては、農業者の高齢化が顕著であり、農業者はこのまま離農

してしまえば地域を存続できないという強い危機感をもっている。基幹産業である農業と地域を継承していくため、既存農家は新規参入者の受け入れに協力的である。町、農協、農業委員会、普及センター等の関係団体、町内農業者のグループが一体となった支援により研修制度や国等の資金制度も充実させており、これらの手厚い支援のもと新規参入しやすい状況を作り出し、実績としてつながってきている。

また、新規参入者の研修においては、農業技術や経営計画も重要であるが、地域農業者との信頼関係を築くことも重要な事項として取り組んでいる。

本町において新規就農者の受け入れについては確立されていないが、人口減少社会を踏まえ、農業者の人口をどう確保するかは、喫緊の課題である。美深町の事例等を参考にし、本町においても対策を講じていく必要がある。

（３）士別市（人口１７，４０４人）

【まちの概要】

〇士別市は北海道北部の中央に位置している。

〇道立自然公園の「天塩岳」があり、国内４番目の長さの「天塩川」がもたらす豊かな水と肥沃な大地に恵まれ、農業を基幹産業として発展した。

〇顔の黒い羊「サフォーク」をまちづくりの中心とした『サフォークランド士別』の取り組みは３０年を超え、多く知られている。

〇冷涼な気候のもと、国内外のトップアスリート等が心身を鍛える『合宿の里』としての取り組みを進めている。

〇積雪寒冷な自然条件を生かした『自動車等試験研究のまち』として、自動車やタイヤメーカー等による試験が盛んに行われている。

【調査目的】

①いきいき健康センターについて

【調査結果】

いきいき健康センターは士別市の健康づくりの拠点として

①高齢者の生きがいづくりと社会参画

②介護予防

③市民相互のふれあい

上記三つを目的として健康長寿推進を図るための施設として１階をサロンスペース、足湯、子供のためのクライミングウオール、交流室・相談室、

２階にラウンジを設け、活動室、多目的室が設置されている。また、喫茶、売店、入浴施設も設けられている。

①サロン事業として

ふまねっとサロン、囲碁サロン、パッチワークサロン、切り絵サロン

②介護予防事業として

いきいきクラブ、サフォーク元気クラブ、いきいきサロン

③介護予防、健康増進に関する教室

カフェ「つながり」、さんあいクラブ

④老人クラブ連合会の交流会

老人クラブ間の交流事業やカラオケ、ダンス、麻雀講座の開催

⑤認知症のチェックシステムの体験等が実施されている。

健康長寿日本一を目指すために、上記の活動のほか健康長寿推進条例、受動喫煙防止条例が制定されており市民にその意図が浸透されるよう努力されている。

これらの各条例は、平成３１年２月に制定され、まだ４年目であることから際立った成果は無いようである。

【考察】

人々の健康管理についての施策の実施とその結果を得ることは地味な活動であるが、どこの市町村においても重要な施策であり、士別市も市民の健康管理についてはその施策の意図が明確に市民に示されていることは重要なことである。

人類のライフスパンが５０年から、６０年、８０年、最先端の科学とテクノロジーが確実に１００年、１２０年と寿命を延ばし続ける時代になるのではないかと思考する時、住民がいかに健康のままで未来に明るい希望を持ち「いい人生」を送ることができるか、その行政施策の実施は今後さらに重要になるだろう。

特に老化は不可避的、不可逆的と考えられているため医師からも「年だから」と済まされることが多いが、これからは老化とは一種の病気であるという認識を基に行政施策の一項目に考えることが必要になる時代だろうと考えられる。老化の根源が何であるかの追及は科学者や研究者に委ねるとしても、行政施策では食事が単に空腹を満たすという時代から健康を維持する役目を持つと考える時代であると考察する。

【総合考察】

〇移転、新規就農

鹿追町の基幹産業は農業であるが、この地域が日本の食糧生産基地として発展してきたのは、国営、道営の農地基盤整備事業による生産効果も大きい。経営規模の拡大に伴い、最先端の大型農業機械の導入やコントラクター事業による作業方法等、農業生産方法が変貌している。労働形態も家族経営から従業員を雇用する等、法人化が進んでいる。

このような本町の農業について、今後の方向性として新規就農者の受け入れによる、地域活性化、地域コミュニティの存続等について調査を行なった。

今回研修した道北の枝幸町、美深町は本町の現状と異なり各農家の経営は家族労働を主としており、意欲ある新規就農者を受け入れることで農家戸数の維持や担い手の育成を進めていた。

新規就農者の受け入れは、町全体で真剣に取り組むことで地域コミュニティの維持やそれぞれの農家が協力し合い、小さくても働きがいのある農業、家族で支えあって生活していく楽しさを感じとることができた。

酪農、畜産、畑作等、農業に挑戦してみたいと夢を持ってやって来る人を町ぐるみで育てる仕組み作りや、資金が無くても参入できる就農システムを確立していた。

一方、美深町での新規就農は現在１６戸が営農しており畑作、水稲、酪農、ハウスによる高級野菜への参入等、多岐に渡っているが同様に手厚い施策があり就農者の経営を支えている。就農の条件として５５歳以下としているが、今後は就農者の健康状態も加味しなければならないとのことであった。

鹿追町においても経営規模は小さくても、農業で生活していける就農方法が求められていくと考える。新規就農者が地域に定着することで過疎化を少しでも食い止め、地域コミュニティの存続につながっていくものと考える。

〇美深町、びふかアイランド、チョウザメ飼育

びふかアイランドは旧天塩川の蛇行した部分の三日月湖に囲まれた域内に展開するレジャー施設である。オートキャンプ場、コテージ、チョウザメ館、パークゴルフ場、温泉施設等があり町民の憩いの場所となっている。この三日月湖でチョウザメを飼育したことがチョウザメを始めるきっかけになったとのことであるが、現在この三日月湖は天塩川とは切り離されているため河川水の流入がなく水質に問題があると思われる。

一方、チョウザメ飼育は現在１万８，０００尾の飼育数であり、本町の２．５倍の飼育数である。飼育施設も多岐にわたり莫大な投資が行われており、さまざまな環境で飼育されていた。施設内には認可を受けたキャビア、肉の加工施設があり衛生的な環境での作業である。しかし町おこし、観光振興の側面もあるが、これだけの施設の投資と飼育数であっても採算割れとのことであり、本町のチョウザメ飼育も今後の方向性を確立し慎重に対応しなければならない。

〇健康、福祉施策

士別市では全国に先駆けて健康長寿推進条例、受動喫煙防止条例が制定されており住民の健康を第一に考えた施策が展開されていた。

士別市のいきいき健康センターは、建物も本町のトリムセンターの機能にさまざまなサロンが加わった施設として、多くの住民に利用されている。健康に過ごすことは最も大切に考えるべき事項であり、特にお年寄りには健康寿命を延ばすことが、生きがいを持って過ごせる大事な要素になると考える。